

丹羽文雄文学全集 第二十四卷
蛇と鳩 守礼の門



丹羽文雄文学全集 第二十四卷

蛇と鳩・守礼の門

一九七五年六月八日 第一刷発行

著 者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二・二二二 郵便番号 一〇二
電話 東京(〇三)九四五一一(大代表)・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えます
©丹羽文雄 一九七五年 Printed in Japan

(文1)

丹羽文雄文学全集 第二十四卷

蛇と鳩・守礼の門

目

次

蛇と鳩
.....
7

守礼の門
.....
249

乳人日記
.....
287

罪
戻
.....
317

創作ノート	413
尼の像	395
声	385
蛾	363
紫雲現世会	351

装幀 辻村益朗
(写真・一九四〇年、箱根路の沢にて)

蛇
と
鳩

投 機

一

雨戸の隙間から、あかりがもれていた。ギターが聞える。つかえ、つかえ弾いている。喉にからんだ声のようである。胸の塞がる苦しさだった。一つの余韻がまったく消えてから、おぼつかなく、次のがはじまる。何かわびしかった。東横線ガード下の稲荷横町であった。看板もあげていないから、昼間は何をしている家か見当もつかない。女がひとり、向うからうつ向いて歩いてきた。呼びかけるように、小心らしく、下手くそにギターが鳴っている。女は顔も挙げなかった。

南口広場から玉電ガード下、道玄坂の方面にかけて、街の女と社交喫茶の客引きが、三々五々付んでいた。この両者の見分けはつげがたい。和服の女が多かった。

夜の十一時すぎ、銀座方面から地下鉄などで帰って来るキャバレー、カフェの女給風の女が目立って多くなった。東横線、井の頭線へ吸われるように消えていく。あそびが

えりらしい連中も、まじっていた。自動車の数も、多くなっていた。待っている車、徐行している車、駆けこんでくる車。渋谷というところは、あくまで乗換える駅だった。私鉄のなくなる十二時すぎまでは、駅付近は自動車で埋まった。車の洪水。東京中の自動車が呼び集められたのではないかとさえ錯覚をする。

一時がすぎると、さすがに自動車の数は少なくなった。舗道にはまだ人影があった。酔っぱらいが多い。その一人は、泥んこになっていた。ふらふらと歩いていく。顔も半面、泥だらけ。それで案外、性根は失っていないのだ。

交番に、二人の男がやってきた。かなりの服装をしている。交番の時計は一時十五分を指していた。

「何ごとですか」

「宇田川町有楽街の、バー・アリセで、ひどいめに遭いました。今後のため、報告にまいりました」

「まったくひどいですよ。たった一時間ぐらいの間ですからね。とりもとり、一万三千二百円です。念のため、領収書をとってやりました」

「税務署へ送ってやりますよ。まったくひどい。ぼり放題、ふんだくり放題です。そんな営業ってないですよ。二人合わせて、二千元ぐらいしか残りません。金があったから殴られずすんだのですが、まったくひどい」

「今後のため、十分取締ってください」

巡查二人は、聞いているだけである。二人の男が離れていくと、

「なあに、あんなのは一ト晩に、五組も六組もあります。」

いまだに別口のが駆けこんで来ますよ」

交番の中には、背の高い、若い男が長い脚をもてあますように腰を下していた。五尺八寸はあるだろう。素直な豊富な髪が、青白い額にたれさがついていた。女にほしいような、強い彫りの二重瞼。一見してこの世界とは関係のない人物とわかる。

自動車がときどき、通った。国電品川行、池袋行はすでになくなっていた。貨物列車が通るだけである。息をきらした若い男が、駆けこんできた。不安らしくあとを振り返っている。酔っているらしい。

「おや、さっきの奴だ」と、ひとりの巡查。

「こら、貴様、今度は何をしたんだ。さっきは警視庁巡查といつて、自動車のただのりをしようとした。今度は何だ」

「ハイ、追っかけてくる奴があるんです。ハイ」

甲高い声で、やたらにハイという。歯切れがよかった。

薄いグリーンのギャバジン、ところどころがよこれていた。

「お前が何かしたから、追っかけられたんだろう」

「ハイ、何もしません。ほんとうです、ハイ」

「無銭飲食だね。そう顔に書いてある。さっきは官名詐欺だ。アゲちまうぞ。ポケットのもの、みんな出してみせろ」

皺だらけの十円札が四枚、マッチ、ボタン一個、西洋たばこ、一つ一つの品名をよみあげて、ハイハイと差し出した。

「もうありません。ごみが残りました。ハイ。水をのませてください」

とたんに、巡查は大きな声を出した。名を訊かれた。職業は、土建業のトラックの運転手だった。

「どこでそんなにのんだ」

「ハイ、最初祐天寺でのもんで、それから家にかえりました。ハイ、赤ん坊にお菓子を買ってきてやるといってごまかして……」

「またとび出したのか。そして無銭飲食か」

そこへ二十八、九の男がやって来た。

「ああ、ここにいた」と、無銭飲食の奴に先回りされて、ちょっと判断に迷っていた。

「この人が、無銭飲食しました。千二百円の勘定です。ボックスに寝こんで、動かないのです。わりやりに起すと、外で払うといつて……ぐんぐん歩きだして、そのうち、駆けだしました。逃げたんです。宇田川町の『丘の木』です」少し、東北の訛があった。

「『丘の木』か。お前は千二百円で、いったい何を注文したんだ」

「ハイ、何も注文しません。何も見ません。何も食べません」

とほけたようで、どこか狡い顔。油断がならない。しばらくといところもあるらしい。先回りして交番に駆けこむあたり、一ト筋縄ではいかぬ謀略家だ。

「君、何で千二百円にしたんだ」

「はあ、珈琲とケーキが二つ、それにフルーツです」

「何も注文しません。ハイ、絶対にしません。嘘、いいません、ハイ」

「嘘いいたら畢丸もぐか」

「ハイ、もぎます。男です。死にます」

「畢丸だけでいい。死ぬな。君、この男は引っぱられたと言ってるが、引っぱりは違反じゃないか。うん？ 営業停止だよ。その女を、連れて来なさい」

「巡査の一人が、長身の、何者とも判らない交番の客に言った。」

「あのマスター、経堂のデカ上りです。あんなのがいるので、とりしまりに困ります」

長身の若い男は、弱々しく苦笑した。彼は思い出していた。深夜、酔っぱらって、この交番の世話になった。それ以来、彼はこの交番の巡査たちと知合いになった。酔う

と、妙に、交番へ顔が出したくなった。癖になった。彼はつとめて素面のときに限り、寄ることにしていた。

「今晚は」

十七、八の女が、はいって来た。女というより、まだまだ少女の域を脱けていない。とまどつたふうな魅力があった。その年頃の、特有の、何ものかに反抗したがる気分が濃い。素人っぽい。そう見られることが残念で、向う気がかりが強いらしい。大人扱いがされたいのだ。自分から大人っぽく振舞ってみせる。爪先で背伸びをしている。緑のセーター、黒と薑の格子のスカート。女は堂々と二人の巡査に向った。

「引っぱりませんよ。ちり紙買いにいって、ぶらぶらしてただけです。したら、この人が、ばんすけとまちがえて、君の家へいこういこうっていうもんだから、連れて来ただわ」

若さを意識して、胸をはった。女は客にくっつかかった。

「注文したんじゃないの。直接はしなくとも、フルーツいい？ ったら、いいって言ってたじゃないの。珈琲とケーキもいい？ ったら、うんうんって言ってたじゃないの。まあずいぶんだわ、あんた、実際男らしくないわね」

「貴様たち」巡査が女に言った。「酔っぱらいの客をとらえて、ガツガツたかりやがって。そのたかる根性が情な

い。誰だって、珈琲とケーキとフルーツで、千二百円もとられたら腹が立つ。いいか。客引きしたら、営業停止だ。君も悪い。この野郎、無一文のくせに。社交喫茶が高いくらいは、知ってるだろう。とぼけやがって」

女は、十八だと応えた。十日ほど前に店に出たのだという。

「十八ぐらいで、客引きなんかして……とめてやるぞ」

「いやです。十八では、どうして悪いんです」

「いまからそんなにませて、どうするんだ……」

「ボーイさんが、何でもいいから一人モノにして来いって言うんだもの」と、尻尾を出した。

「どこの生れだ」

「江戸っ子よ」朗かである。

マスターが、二十二、三の女をつれて来た。

「まあ、ずいぶんだわ。あんた、もう十分、もうあと十分って、起してもなかなか起きなかったじゃないの。三万円もってるから、それだけのむんだって、威張っててさ、実際、男らしくないわ」

押問答がはじまった。

「とにかく、男同士で話し合いたまえ」と巡査は投げ出した。

「一銭も払いません、ハイ」

「どうしてですか」

「理由は言いません、ハイ」

交番の客は、にやにやしていた。おもしろくてならないふうであった。

「よし、お前がそれほどいうんなら、いい。お前は無銭飲食、『丘の木』のほうは、引っぱりで違反だから、署まで行ってもらおう」

巡査が言った。ちょっと沈黙になった。

「自分です、ね、ハイ、自分の気持で半分でも、とにかく払おうと思ってたんです。ハイ、でもです。それは、マスターがおとなしい、いい人だから払うんで、ハイ、この女の人たちには、こんな冷たい連中には払いませんって言ったんです。ハイ」

「それでいいか」

「ハイ、そうしていただければ、ハイ」

「じゃ、帰んなさい。あちらで二人で、払う方法とか期日を相談しなさい。それから『丘の木』は、明日、答申書を書いて持ってくる、何時何分ごろどうして引っぱって、どうなったかという書類だ。いいね。忘れるな。両方とも今度、何かしたら承知しないぞ、いいな」

べこべこ頭を下げて、四人は退場した。

「ああして答申書を出せと言っておくと、『丘の木』のほうも営業停止をくらうのがこわいから、あの男から金をとらず、沙汰なしにしてくれと言って来ます。まったく世話

をやかせる連中です」

パトロールしていた一人の巡査が、帰って来た。若い客にちよつと眼顔で挨拶をしてから、電話をかけた。百軒店で窃盗があった。が、未遂に終わった。追ったが、どこかへ逃げたと言ひ、電話を切った。

巡査は歩き疲れていた。彼らの交番勤務割は、一週間交代であった。八時から二時、この勤務に限り、終ってから四時までは、本署にいななければならないのだ。二時から夜の十時、十時から朝八時までの三勤務制であった。夜間勤務は、交代で二時間ずつ仮眠する。二人はパトロール、二人は交番にいる。自宅にかえつてもよく眠れないという。疲れがひどすぎるからだ。四日目ごろから、小便が赤くなるという。

「そんなことを調べて、どうするんですか」と、巡査がいう。

「いや、別に、ものに書くというわけでもないのですが、皆さんのそうした毎日の苦勞が知りたいだけです。あんまり世間のひとの知らない苦勞ですからね。知れば、知つたで、何となく僕自身……」

あとはどう形容してよいか、背の高い青年には判らなかつた。にやにやとしていた。無邪気な、弱気な微笑である。巡査も何ということなしに苦笑する。巡査には、もの好きな青年としか映つていない。背の高い男は、夜の駅前

の風情が好きだった。時間による刻々の変化が、おもしろかつた。それが毎日正確にくりかえされていた。昼間玉電のガード下にいた靴みがきが、場所を夜明しの中華そば屋に譲ると、駅前ハチ公の周辺でアセレンガスをつけ、商売をはじめるのである。彼は知っていた。易者のかえり支度をはじめると、露店の店じまいの時刻も覚えていた。夜明けの五時の鐘は、東横の時計だ。チンコンとひびいた。広場から見ると、渋谷駅の真上に月がかかる。国鉄の始発は、上野行が四時十三分、品川行が四時二十五分である。そんなことまで覚えて、どうするのか。どうするあてもないのである。漠然としていた。夜更の交番にあそびに来るのも、その動機は漠然としていた。彼のからだの中には、漠然としたものが大部分を占めているらしかつた。PL教団か、猿楽の乗泉寺に朝まいりする人たちが、電車からおりてくるのも、彼は目撃している。子供の手をひいた女、若い女、年とつた女の連れなどが、朝早く詣りにいく。男よりも女のほうが多かつた。若い女は、たぶんPL教団の朝詣りであらう。この教団では、誰でも早朝五時から六時の間に、必ず教団におまいりをしなければならぬことになっていた。なまけ者は、入団できない。その日のシキリ（決心）をのべて、PL礼拝をして帰っていく。背の高い男は知っていた。PL礼拝が、両手を高く上げ、腕から先を自分の頭の上で曲げ、手のひらを外に向け

るといふ独得のやり方。両手で角を描く形だった。

先ほど、一度交番をのぞいて、大勢いたので通りすぎた男が、現れた。

「ちょっとお伺いしますが」何かかんでいた。チューインガムか。「あのう、社交喫茶店の値段はきまっていますか」

「どうかした？」と、巡査。

「金が足りなかったので、殴られたんですけど、あのう、ご相談したいと思って、それは足りなかったのが悪いんですが、その、殴られたりしたの、いったいどうなんですか」

「どうなんだって、君、そこはどこだ。殴られたりして、相談もくそもないだろう」

「いや、その、訴えるっていうんじゃないんです。その、新聞には人民裁判だなんて言ってるでしょう。だもんだから、ちょっと相談にあがっただけです」

「日本じゃ人民裁判なんかないよ。何のために警察があるのか。どこだ、君が殴られたところは？ 東京は初めてだね」

栃木から出てきたという酒屋の息子。あちらこちらで焼酎を一升近くのみ、客引につかまり、社交喫茶に入った。ビール一本、珈琲とケーキで、千三百円の勘定であった。六百円しか金がなく、結局米穀通帳をとりあげられた。表

戸の鍵を下して、十数回殴られたという。ただし、どこにも傷はうけていなかった。

「社交喫茶ってものは高いって聞いてましたが、やはり、その助平根性で入ってしまったんです。それはもちろん払いますが、その、米穀通帳を取りかえさないと。どこの誰だか判らないし、無理はないんですけど」

この男は、もの判りがよすぎた。警官が喫茶店の名をきいて、さっそく出かけていった。バーテンと、額に傷痕のある（戦傷という）二十八、九の童顔の男をつれて来た。殴った、殴らないの争いが、しばらく続いた。巡査が中にはいった。

「鍵をかけて殴るってえのは、暴行罪と不法監禁罪だ」連中は黙った。

「日本はまだそんな国じゃねえぞ、何のためにお前らが税金を払って、警官がいるんだ」これは、殴られた本人へ言った言葉。「うん？ 勘定が足りないなら、足りない、食い逃げなら食い逃げと、なぜすぐこへ連れて来ないのか。勘定の代りに、背広を脱げの何のって、強盗だぞ」と、殴ったほうへの言葉である。つづけて巡査は言った。

「あんちゃん、おめえ、そんなに腕が鳴るのか。そんなに腕が鳴るんなら、交番にかかって来い。うん、お前、柔道何段だ？ おめえには、目ざわりだろう、交番なんか潰しに来ねえか。うん？ こら、あんちゃん